

縄文時代の環境と縄文人の植物利用－前田遺跡を念頭に－

学習院女子大学国際文化交流学部

工藤 雄一郎

はじめに

縄文時代の遺跡を発掘すると、大量の土器や石器、竪穴住居跡、土坑などが出土します。これに対し、植物質の遺物は縄文時代の遺跡ではなかなか残りません。ナマモノである植物は土器や石器と違い微生物等に分解されてしまうためです。炭化したものであれば燃料材や住居の部材、食料残滓などが遺存することは普通にあるのですが、多くは断片的です。したがって、植物利用の具体像は不明瞭な点が多かったのです。

しかし1970年代後半から1980年代以降、大規模開発にともなって縄文時代の低湿地遺跡の発掘調査事例が急速に増加しました。「縄文のタイムカプセル」といわれた福井県鳥浜貝塚をはじめ、青森県三内丸山遺跡、栃木県寺野東遺跡、東京都下宅部遺跡、新潟県青田遺跡、佐賀県東名遺跡など、数多くの低湿地遺跡が調査されました。これらの遺跡では低地に水漬けの状態で有機物が保存されたため、植物質の遺物が腐らずによく残っています。食料を加工した際に廃棄した種実や、種子そのもの、弓や斧、容器類などのさまざまな木製品、編物や繊維などの遺物です。また、低湿地には人が残した遺物以外にも、未分解の植物遗体

(花粉・木材・種実など)を多く含んだ自然の堆積物が残っており、これらは縄文時代の人が暮らしていた当時、その場所がどういった環境だったのかを知る非常に重要な材料となります。

図1は福井県三方湖の湖岸に立地する縄文時代前期の鳥浜貝塚の例です。遺跡は三方湖に注ぐ鱒川の水面よりも低いところに縄文時代の遺物包含層がありますが、光と空気から遮断され、水漬けになっています。鯉本眞友美さんはこの特徴を、低・湿・地・遺・跡の5文字を使ってわかりやすく説明してくれ

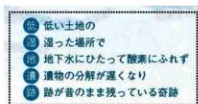
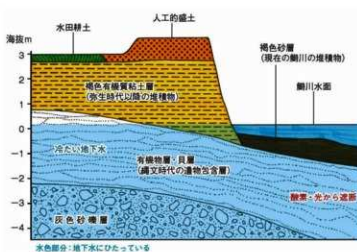


図1 福井県鳥浜貝塚の堆積状況の例 (鯉本2017より)

ています。

川俣町で発掘された前田遺跡もまた、そのような貴重な縄文時代の低湿地遺跡の一つなのです。前田遺跡の場合は、遺跡のすぐ近くを流れる高根川の段丘面に立地している、低地のように見えませんが、実はかつての河道が作った谷地形が段丘面の下にあり、そこを現在も豊富な地下水が流れ込んでいるようです(図2)。この谷は、前田遺跡で暮らしていた縄文人にとって重要な生業活動の場所であり、谷の中とその周囲に多くの遺物が残されました。前田遺跡のこの特殊な遺跡立地が、多数の木製品や種実遺体、編組製品、漆製品などの貴重な遺物を数千年にわたって保存してくれたのです。



図2 前田遺跡の発掘調査(2019年8月、工藤撮影)

写真中央の発掘調査区が旧河道による谷地形になっている部分。ここから多数の植物質遺物が出土した。

縄文人と環境とのかかわり

一般的には縄文時代の人々は、狩猟・漁撈と野生植物の採集を中心とした生活を送っており、植物の管理・栽培といった高度な利用は、水田稲作農耕が伝来する弥生時代からだと考えられてきました(古くから縄文農耕についての議論はありました)。しかしながら、低湿地遺跡の発掘調査が進展したことによって、縄文時代の人々が単なる狩猟採集の範囲を超えて、植物の生育に何らかの形で関与していたことはもはや明らかです。縄文時代にクリやウルシといった有用樹木の資源管理があり、またアサやヒョウタン、エゴマやシソ、マメ類などの有用な一年生草本の管理・栽培があった可能性が高いことはかなり明確になってきています。現在は、その管理・栽培の対象となった植物の特定、そして管理・栽培の程度、外来栽培植物の移入時期などについて研究が進展しつつあります。

普段利用するもの、生活にとって特に重要な資源は、近くにあったほうが便利なのは、縄文時代も現代も変わりません。縄文人は有用な資源を周囲の森から集めてきて利用するだけでなく、集落周辺にかなり人為的な生態系を作り上げていた可能性が考えられるようになってきています。図3は能城修一さんによる縄文時代の集落生態系のモデル図です。縄文時代後期の東京都下宅部遺跡の成果に基づいて作成された集落生態系をイメージ図です。

が、縄文時代前期以降の東日本の拠点的な集落に適用できると考えて良いでしょう。

居住域の周辺では里山の・二次林的な生態系が成立し、その中心部に近いところには、マメ類やアサ、ヒョウタンなどが栽培され、クリやウルシの管理された林があったと推定しています。このような人為的な生態系は、前田遺跡周辺でも広がっていた可能性があります。現在行われている各種の自然科学分析によって、実態が徐々に明らかになっていくことでしょう。

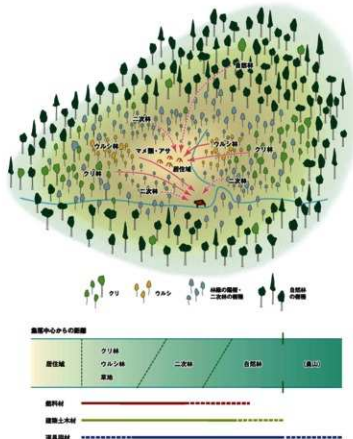


図3 縄文時代の集落生態系モデル図 (熊城 2014 より)

高度な漆文化と前田遺跡での新発見

日本列島では縄文時代早期末（約 7500 年前）以降、多数の漆器が出土するようになります。縄文時代の漆文化が当初から極めて高度であったことが分かかってきおり、赤色漆と黒色系漆の明確な使い分けや、象嵌の技術が確認され、縄文時代後期（約 4000 年前）以降には、赤色顔料におけるベンガラと水銀朱の使い分けなどが解明されています。また、漆工用具の出土によって、漆液の精製から漆器の製作までの一連の過程を追えるようになっています。

図 4 は私が 2014 年に作成した漆文化の動向を示した年表ですが、ここでは「中期の漆文化は低調」と書いてしまいました・・・というのは、これまで縄文時代前期と後晩期と比較して、縄文時代中期の漆器の出土事例が少なかったのです。縄文時代中期の低湿地遺跡の発見が少ないことも関係していたのでしょう。しかし、これが「私の大きな認識違い」であることが前田遺跡の発掘調査で明らかになりました。縄文時代中期の前田遺跡の漆製品の充実ぶりは、眼を見張るものです。

前田遺跡からは出土した漆製品は、縄文時代中期後葉の 4700 年前ごろに集中しています。漆塗り土器や非常に大きな木製の漆塗り浅鉢、漆塗りの弓などの素晴らしい木製品

